

## 第9回（仮称）やまと芸術文化ホール基本構想検討委員会 会議録

会議名 (審議会等の名称)	第9回（仮称）やまと芸術文化ホール基本構想検討委員会		
開催日時	平成20年10月31日（金）午後15時00分～午後15時30分		
開催場所	市役所5階 委員会室		
出席状況	検討委員	6名（小川委員、倉田委員、桑谷委員、西巻委員、古橋委員、米屋委員）	
	アドバイザー	（株）シアターワークショップ 伊東氏ほか1名	
	事務局 (担当課)	3名（企画政策課長ほか2名） 企画部 企画政策課 総合政策担当 （内線 5304）	
	傍聴人数	2名	
<p>1．会議次第  (1) 提言書について  (2) その他</p> <p>2．議事要旨  (1) 提言書について  アドバイザーから「大和市に望まれる芸術文化ホールについて ～提言（案）」について説明。  質疑</p> <p>（倉田委員）：本日提言予定の提言書案について、お気づきの点があればご意見を頂きたい。もしご意見がないようであれば、最後の委員会なので、是非一言ずつお話し頂きたい。</p> <p>（米屋委員）：文化振興計画や文化振興条例についてコメントで加筆すべきだったと考えている。是非今後、市のご担当の皆様には継続してご検討いただくよう、お願いしたい。</p> <p>（古橋委員）：今回の委員会の中では私の専門分野として、二つの視点からお話をさせていただいてきた。まず、私の現在の職場が大和市に近いことや、若いアーティストと触れる機会が多いため、プロアマ問わず育てる視点から。それから、劇場建築計画という視点であった。劇場建築計画という立場から付け加えさせていただくと、敷地がまだ決定しないため、今後実際に敷地にプランを落とし込んでいくときには、何らかのハードルや重要な選択が控えている。そこで初めて生みの苦しみを味わうことが予想される。市の皆さんにも継続して検討を進めていただき、現実の計画が出来上がるまで進めてくださるよう、切に願っている。</p> <p>（小川委員）：私自身の専門分野は劇場技術ということで、大きく文化的な側面や、まちづくりに関わる部分は他の委員の先生方にお任せしてきた。提言書の基本コンセプトにある、「市民一人ひとりに感動を与える施設」や「市民一人ひとりの創造力を高める施設」という部分を念頭に置きながら、特に劇場の使い勝手の側面について、今後を展望しながらお話ししてきた。とにかく、この提言の後が問題だと考えている。今回はあくまで提言である。今後具体化して進めていくときには、その過程で細かなご苦労があると思うが、</p>			

真摯に取り組んでいただけるようお願いしている。

(桑谷委員): 私自身、常々感じるのは、こうして基本構想や提言をつくり、それが計画の段階に移り、更に最後の実施段階になってみると、当初の構想とは全く別の形になってしまっている場合がある。予算の関係や、首長の交代により方向転換をすることもあるかもしれないが、がっかりすることがある。今回の提言で思うことは、10年後、20年後にこの提言書がどのようになっているかである。つくった劇場は、私たちのように引越はできない。つまり、その場所から動くことが出来ない。そのため、つくるときにはしっかりつくってあげなければならない。評価されない劇場をつくってしまったら、大変なことになってしまう。長い目で見て、計画性のある考え方で、劇場についての方針を立てていかなければならないと考えている。今回もその考えに基づいて、いくつか提案させていただいたが、とにかく、いまの経済状態を踏まえて、身の丈に合った劇場を作りたいと考えていた。市の皆さんにも、その点をシビアに肝に銘じて取り組んでいただければと思う。

(倉田委員): 様々な分野の方にお集まり頂き、様々な配慮をした提言書が出来たと思う。私自身は劇場の専門家ではないので、技術的なことや、劇場そのもののあり方について、素人的な視点で意見を申し上げてきた。本提言書の検討を通して、私自身が気にかけてきたこととしては、こういった文化施設が「ハコモノ行政」として議論の対象になってきている点が挙げられる。こういった施設は、経済的に余裕のあるときにだけ作ればよい施設ではなく、成熟社会に向かっていく時代にこそ、必要な施設だと考えている。常に市民の生活の中にあり、医療や福祉と同じように、我々の生活を豊かにしていく大切な要素である。これまで、物的なものに支配されていた消費社会の時代から、精神的な営みを含め、健康的に暮らしていくことへの転換が叫ばれる中で、欠くことのできないものである。そういう視点で、この施設に関する活動を行政の中でも位置づけていくことが必要である。もう一つ、私自身の専門的なまちづくりの視点でいうと、本施設を計画することは、ホールという建築に限らず、「場作り」をすることだと考えている。その「場」において、市民の交流が生まれることが、本施設に期待される役割の一つである。つまり、今回の施設は文化施設でありながら、コミュニティ施設としての役割を期待されていると考えている。最近では、まちづくりの次に「まちづかい」という言葉を使う人も出てきている。作ったものをどう使うかが大事なのである。ある一時だけ活発に使われればよいということではなく、持続的に発展していく形で、使われることが必要である。それには、管理運営という視点が重要である。是非とも、提言を受けて行政で市民の方に計画段階から加わってもらいながら、具体的な形になっていくことを期待している。

(西巻委員): 提言書に書かれたことで、考えていたことの殆どが言い尽くされているが、今の時代は、芸術文化が一層大事な時代だと考えている。一方で、経済状態が逼迫してくると、芸術文化にかかる予算が真っ先に切られるのもまた現実である。その状況下で、このホールが市民生活にとってよりよい豊かさをもたらすという考え方を共有しながら、検討を進めてきた。それ自体は非常に素晴らしいことで、今日の委員会が終わっても、協力していけたらと思っている。是非いい施設をつくってもらえればと思っている。ホール

は「つくること」が目的ではなく、「つくってから何をするか」が大事である。様々な可能性を考えて頂き、開館後、身の丈にあった事業をきちっと行っていくことをお願いしたい。

(小川委員): 先の話になるが、ホールが建って、運営が20年30年40年と続いていったときに、どのように運営していくか、先の長い視点をお忘れないように、持っていただきたい。

(桑谷委員): 劇場の建設計画を手がけてきて、気がついたこと、あるいは大きく考え方を変えなければいけないかもしれない点がある。それは、予算に関わることである。経済的に、どんな時代が来たとしても、安定した予算を劇場に投資するということが、市民にも行政にも負担にならないという前提のもと、続けられることが重要ではないかと考えている。それは予算計画として安定した投資を行う必要があるということである。税金と人口を将来的な予測も含めて考えれば、安定した数字が算出できるのではないか。無理のない数字で劇場運営をすべきである。バブル期から、贅沢なホールがつくられるのを見てきて、バブルがはじけ、現在のような時代になった。このように、大きく経済状況が変わってくることを鑑みて、個人的にはそのことを大きく反省している次第である。地道に、落ち着いた劇場経営をすべきではないかと考えている。

(倉田委員): 提言書については、この内容で市長に提言するということではどうか。

(一同):(異議なし)

(倉田委員): では、案を消して市長にご提案申し上げたい。皆様には、当初より時間をかけてご議論頂き、時間を掛けただけの甲斐があったと感じている。是非ともこの内容を真摯に受け止めていただき、市でもこの次の展開を進めていただければと思っている。本日はありがとうございました。

### 3. 委員会資料

資料1「大和市に望まれる芸術文化ホールについて ~提言(案)」

以上